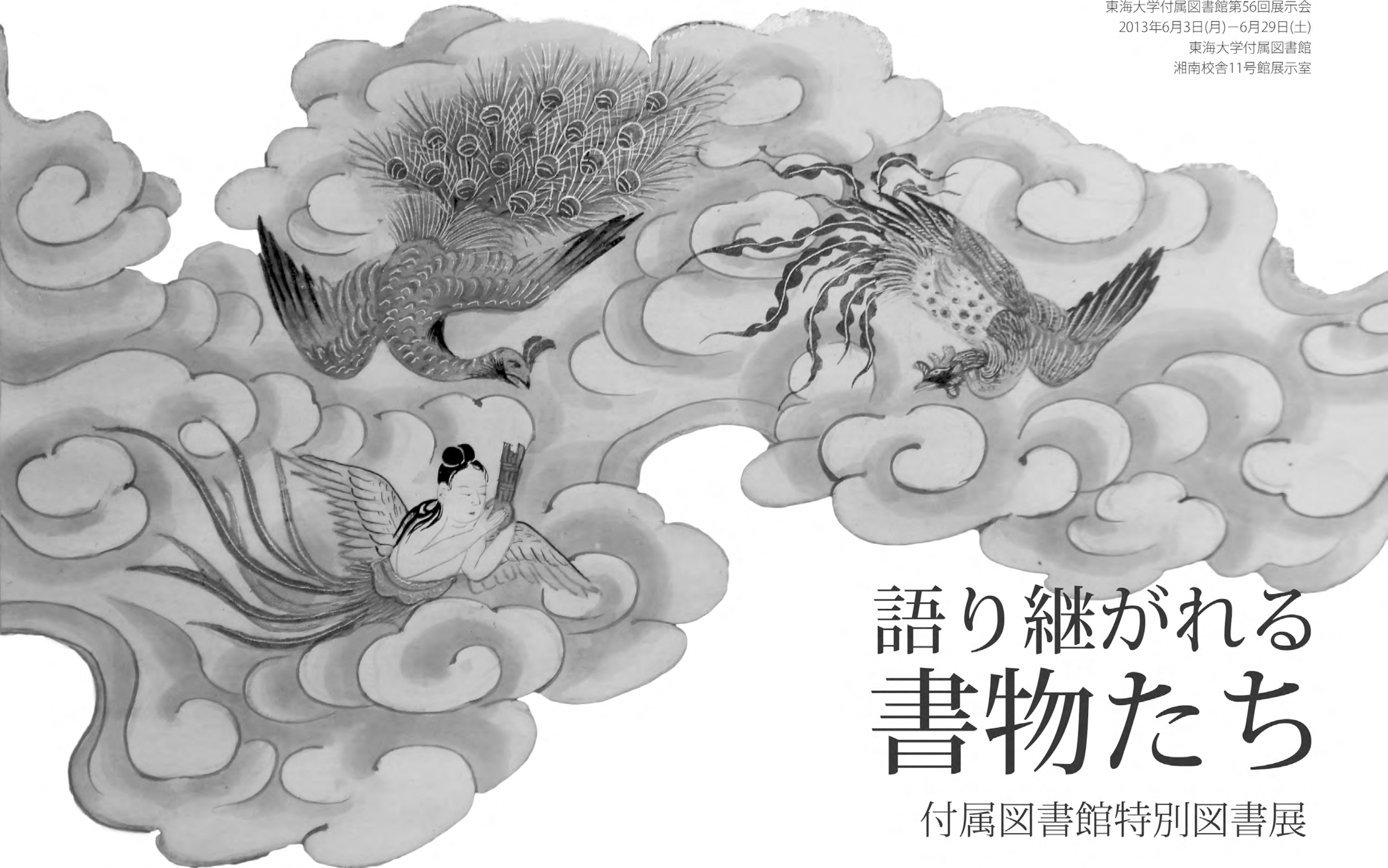


東海大学付属図書館第56回展示会
2013年6月3日(月)－6月29日(土)
東海大学付属図書館
湘南校舎11号館展示室



語り継がれる 書物たち

付属図書館特別図書展

最近の展示

- | | | |
|-------|-----|---------------------------------------|
| 2009年 | 6月 | 日本の印刷史と装丁のおもしろさ |
| | 11月 | 外国から見た日本 ―幕末から明治初期― |
| 2010年 | 6月 | ノーベル物理学賞1901-1950 ～近代科学に影響を与えた科学書と共に～ |
| | 11月 | 豊道春海先生作品展 |
| 2011年 | 11月 | 悠久のナイルと人々～鈴木八司古代エジプトコレクション展 |
| 2012年 | 5月 | 國文學の傳燈〈写す・読む・伝える〉 |

展示にあたって

今回の展示では、本館所蔵資料のうち、古くは世界最古の印刷物といわれる百万塔陀羅尼、近くは文明開化の世を走り出す蒸気車の錦絵まで、日本の歴史的な出版物の中から幅広く選定を行った。巻物・系図・奈良絵本・木活字本・香の図・かるた・錦絵といった、その時代を代表する資料にご注目いただきたい。

華麗な平安時代の貴族社会、繁栄と没落を繰り返す武士たち、旅に遊ぶ江戸時代の庶民、その成立より現代まで連綿と受け継がれてきた文学作品研究の成果など、書物は当時を生きた人々の思いを伝えてくる。

この展示会によって、先人が語り継いできた書物について、より多くの皆様に興味を持っていただければ幸いである。



「栄華物語」より、迦陵頻伽(かりょうびんが)

1. 十二月あそび（じゅうにがつあそび）

江戸中期写（1700年代） 2軸

京の月ごとの行事を風俗絵巻仕立(奈良絵本※1)にしたもので当時の遊びの様子などがうかがえる。

2. 源氏物語系図（げんじものがたりけいず）

鎌倉初期写 1軸

本書は、五摂家の一つ九條家に伝来したものである。巻首と巻尾の部分に相当な損傷ならびに虫損がみられる。これらの箇所は丁寧な補修が施されており、この補修はかなり古く、「九條」の蔵印はこの補修のまえに押印されたものと推定される。また現存する古系図中唯一の例として、裏書が存在する。

池田亀鑑博士※2が本書について「鎌倉時代の初期を下るものではあるまい。その字形書風から平安朝に入るものかと思われる」と述べられているように、現存する古系図中最古の写本である。現行の源氏物語五十四帖の確認や登場人物の呼び名など「源氏物語」の研究・享受史における貴重な資料である。

3. 笠間長者鶴亀物語（かさまちょうじゃつるかめものがたり）

寛文・延宝頃写（1661-1681） 1軸

室町時代に成立。金銀泥極彩色の奈良絵本。常陸国笠間郡の北山の長者の娘、かたをり姫は鶴を愛し、南山の長者の息子、さく花丸は亀を愛していた。やがて二人は夫婦となり、鶴と亀の導きで不老長寿の生涯をおくる。夫婦は後に女筑波・男筑波の神となり、鶴・亀も鶴の宮・亀の宮として崇められた。



「笠間長者鶴亀物語」より

4. ぶんしゃう

江戸中期写(1700年代) 3軸

室町中期頃に成立。別名「文正草子」「しほやきぶんしょう」など。立身出世が描かれた奈良絵本の御伽草子※3。

鹿島大明神の大宮司に仕える文太という者が大宮司の怒りにふれ追放されてしまう。その後、塩屋になって塩をつくるが、それが高値で飛ぶように売れて、たちまち大長者となり、名を「文正つねをか」と改める。子宝に恵まれなかったが鹿島大明神に祈ったところ二人の美しい娘を授かる。成長した姉の蓮華(れんげ)は二位の中将に嫁いで北の方となり、妹の蓮(はちす)は帝に召されて寵愛され、皇子を出産して中宮となる。文正も大納言となって、妻と共に長寿・栄光を極めた。

めでたづくしの御伽草子であり、姉妹の栄華が描かれていることから、特に女子の正月の読み初めの書物として嫁入り道具にも加えられ、多くの華麗な写本が製作された。



「ぶんしゃう」より

5. 百万塔陀羅尼(ひゃくまんとうだらに)

宝亀元年(770)製作 1基

印刷年が明らかなものの中では、世界最古の印刷物(木版印刷か銅版刷かとの論争は百年以上になるが決着がついていない)で、奈良時代の宝亀元年(770)につくられた。塔は轆轤細工(ろくろざいく)でつくられ、三層の塔から成る。彫り抜かれた上部の中には「無垢浄光大陀羅尼經(むくじょうこうだいだらにきょう)」が納められ、「九輪のぎぼし」がその栓となっている。

6. たけとり物語（たけとりものがたり）

江戸初期写（1600年代） 2冊

作者不明で、平安初期の成立とされる。上下二巻の奈良絵本である。上巻は「いまはむかし」から「あな絶かたとはいひはしめける」まで、下巻は「中納言いそのかみのまろたりの家に」から「とそいひつたへたる」までで、正保年間(1644-1648)刊行以降の分け方と同じである。また挿絵も全く同じ場面で、構図もほぼ同様である。本文も板本と同系統であるが、行数や漢字仮名の区別は一致しないので、板本から直接写したものではないと考えられる。巻末の識語から安藤和久之丞なる人物の筆により、元禄頃に書写されたものと推定される。

7. 伊勢物語（いせものがたり）／ 在原業平著

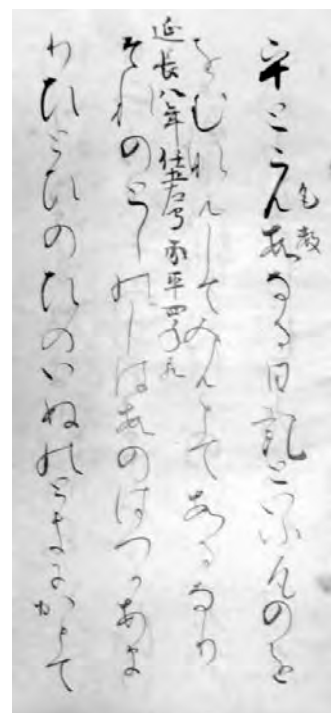
室町中期写 1冊

本書の巻末には、「流布本の奥書」「武田本の奥書」「天福本の奥書に付された注記」と定家本三系統本の奥書が転載され、さらに「承久三年書写の定家自筆本の奥書」が、定家筆蹟を模した形で転写されている。これは、既に書写されていた定家三系統の集成本に本書の書写者が「承久三年定家自筆本」を校合し、書写したものである。書写年次は奥書によると、永正5年(1508)某月二十六日である。本書により、定家がその生涯に数度書写している「伊勢物語」の中に承久3年書写のものがあつたことが明らかになった。また定家が承久3年に書写した「伊勢物語」の実体を知るためにも貴重な資料である。

8. 土佐日記（とさにっき）／ 紀貫之著

延享頃写（1744-1748） 1冊

本書は、「青谿書屋本」と呼ばれるもので、池田亀鑑博士がその学問的価値の高さを考証された本である。その祖本である「為家自筆本」は「貫之自筆本」を極めて忠実に書写した本として、正確度は定家本に勝り、学術的価値も一段高いとも言われているものである。本書もまた、それを忠実な書写態度が見とめられ、「為家自筆本」と同等の価値におかれている。なお、「青谿書屋本」は、冷泉為村が桜町天皇の命を受けて書写し、献上したものの又写しであろうと言われている。



右図……「土佐日記」より
「をともすなる日記といふものを
をむなもしてみんとてするなり」
の書き出しがみえる。

9. 明融本源氏物語（めいゆうぼんげんじものがたり）／ 明融筆

室町後期写 9冊

本書は、巻頭部分に明融筆とする、琴山印の極札※4 めいたものが貼付されていることにより、「明融本源氏物語」と呼称されている。この明融本九冊（「桐壺」「帚木」「花宴」「花散里」「若菜上」「若菜下」「柏木」「橋姫」「浮舟」）が「源氏物語」の本文資料として貴重とされている理由は、青表紙本（藤原定家が「源氏物語」の校訂を行う際に用いた青い表紙の本）原本の字形・字配り等を、そのまま忠実に臨写した写本であると考えられているからである。

明融は上冷泉為和の長子で、歌人で山科言継とも親交があった。「源氏物語」の書写にも関与したことは明らかである。記録より推測すると、天正9年（1581）に没したと考えられる。

10. 源氏香の図（げんじこうのず）／ 歌川豊国（2世）画

江戸末期刊 1帖

江戸時代末期の浮世絵師豊国（2世）による源氏物語各巻の人物絵。源氏香とは、香道の組香の一つで、五十二の香それぞれ源氏物語の帖の名前を付したもの。香は一つ一つ縦線と横線を組み合わせた図で示され、これを源氏香の図と言う。



「源氏香の図 柏木」より

11. 栄華物語（えいがものがたり）

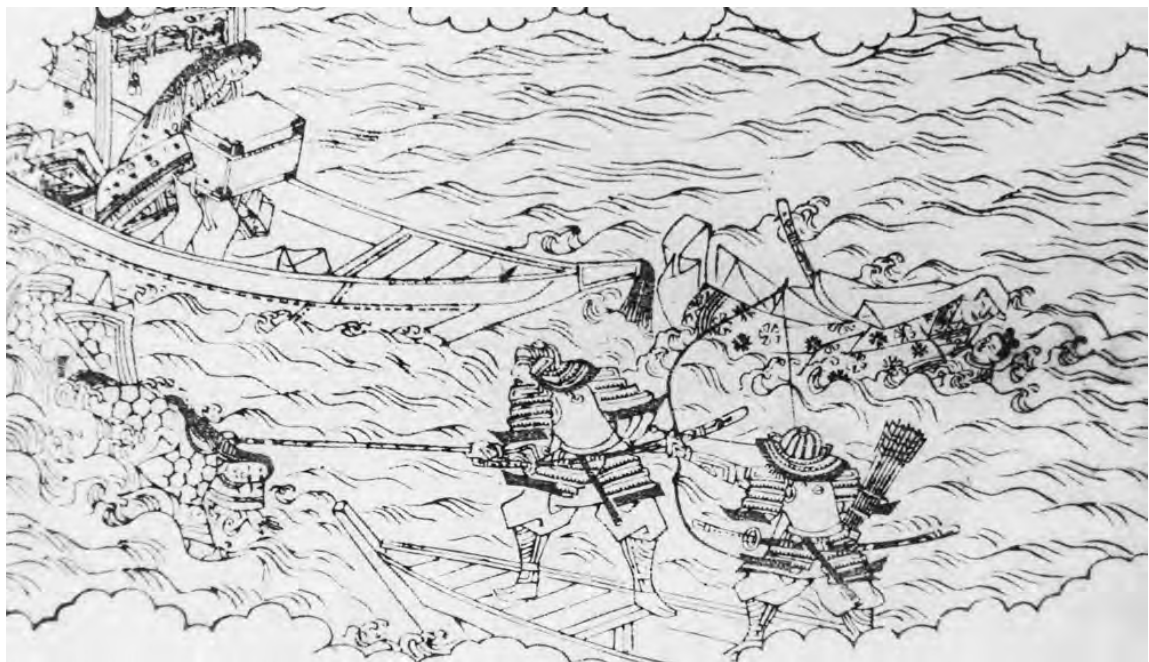
江戸中期写 41冊

正編は長元3年(1030)頃、続編は寛治6年(1092)頃成立。正編の作者が赤染衛門、続編が出羽弁とされるが未詳。宇多天皇(887～)から堀河天皇の寛治6年までの約二百年間の宮廷を中心とする貴族社会の歴史を、編年体で仮名文の物語風に記されている。「栄花物語」とも書き、「世継物語」ともいわれている。史実に対する批判精神は乏しいが、歴史物語という新しい領域を開いた点に大きな意義のある物語である。本書は雁皮紙※5に一面十行で書かれ、胡蝶装※6、紺地に金糸文様の布表紙、各冊左肩に題簽、見返しには金箔を使用した豪華な仕立てとなっている。江戸中期に書写・作成された奈良絵本である。

12. 平家物語（へいけものがたり）

京都 平安城書林 元禄12年(1699)板行 6冊

鎌倉時代に成立した軍記物語。治承4年(1180)から元暦元年(1184)にかけて展開された源平合戦を中心に、平家の栄華と没落を描いている。琵琶法師によって語り継がれ、後の日本文学に多大な影響を及ぼしたと言われている。平家の滅亡を決定づけ、建礼門院や二位尼、安徳天皇の入水に至った壇ノ浦の戦いの段が特に有名である。



「平家物語」より

13. 百人一首カルタ（ひゃくにんいつしゅかるた）

江戸中期頃製作 1組(200枚)

天智天皇から順徳天皇時代までの百人の歌人の和歌を、一人につき一首ずつ藤原定家が撰した「小倉百人一首」をカルタにしたもの。読札(絵札)は木版刷の奈良絵で、彩色されている。読札100枚、取札(字札)100枚共に漆箱入り。

14. 梅枝（うめがえ）

慶長中期刊（1600年代） 1冊

「謡曲百番」の一つであり、題名は本文中の「梅が枝……」の記述による。本書は嵯峨本※7の特徴がよく出ていて、表紙は雲母模様で鶴の絵がほどこされている。題簽には「むめかえ」とある。平仮名交じりの古活字版である。

15. 玉ものまへ（たまものまえ）

元禄頃写（1688-1704） 3冊

室町時代前記頃に成立。鳥羽院の御所に博識で弁才巧みで、身から光を放つことから玉藻前と呼ばれる女が現れた。院に寵愛されるが、実は下野国那須野に住む八百歳の狐の化身であった。折しも院は病にかかり、陰陽頭の安部安成は玉藻前が原因と見破る。姿を消した玉藻前を上総介と三浦介が命を受け、ついに狐を討ち取るという怪物退治を語る御伽草子である。



「玉ものまへ」より

16. 大黒舞（だいこくまい）

延宝頃写（1673-1681） 2冊

別名「大悦物語」「大えつのすけ」ともいう。室町末期頃成立の御伽草子。極貧の両親を思い、主人公である大悦のすけが清水観音に祈ったところ、大黒天と夷三郎(えびすさぶろう)という二神の恵みを受ける。大悦は富み栄え、昇殿を許されて中納言の姫と結婚、三男二女をもうけ、一家は末永く繁盛を極める。立身出世、子孫繁栄を語っためでたづくしの祝儀物の御伽草子である。

表紙は金欄緞子装。旧蔵者はイギリスの日本研究家であったバジル・ホール・チェンバレン(1850-1935)であり、チェンバレンの使用した蔵書印「英王堂蔵書」を見返し部分に見ることができる。

17. 道中膝栗毛（どうちゅうひざくりげ）／ 十返舎一九作・画

江戸 梶屋喜兵衛 文化・文政頃刊（1804-1830） 10 冊

「東海道中膝栗毛」ともいう。展示資料の内題は「道中膝栗毛」、題簽は「東海道中膝栗毛」。発端、初編は各一卷一冊。二編から七編までは各々上下巻合冊。ただし「五編追加」は一冊、八編は上中下巻を合冊。

江戸から伊勢参宮に旅立った弥次郎兵衛と喜多八の二人の道中の失敗談などが書かれている滑稽本※8。街道筋の人々の様子が狂歌を挿んで描かれている。はじめ享和2年(1802)から文化6年(1809年)にかけて刊行され、非常な人気を博したため、続編にあたる「続膝栗毛」、「続々膝栗毛」も書かれた。



「道中膝栗毛」より

18. 五十三次名所図会（ごじゅうさんつぎめいしよずえ）戸塚・藤沢・平塚・大磯・小田原／ 歌川広重画

安政2年（1855）頃刊 5 枚

江戸時代の画家、歌川広重(別名安藤広重、1797-1858)による錦絵※9。豎(たて)絵と、俯瞰の構図が特徴。広重は出世作「東海道五拾三次」の刊行後も何度か五十三次の図会の製作を手がけているが、今回の展示分もその一つ。全 55 枚のうち本学所蔵は戸塚・藤沢・平塚・大磯・小田原の 5 枚である。



「五十三次名所図会 平塚」より

19. 富士詣独案内（ふじもうでひとりあんない）／ 橋本玉蘭(歌川貞秀)画

江戸末期～明治初期刊 3枚

富士山から周辺を一望するように、日本橋(東京)から久能山(静岡県)までが描かれた錦絵。詳細にみると、本学発祥の地・清水キャンパスのある三保の松原、沼津キャンパスの周辺、湘南キャンパスのある平塚周辺、高輪キャンパスのある泉岳寺周辺なども描かれている。

浮世絵師橋本玉蘭(別号歌川貞秀、1807-1873)は鳥瞰図を得意とした絵師で、特に幕末に開港した横浜の鳥瞰図と居留する外国人やその風俗・文物を題材とした錦絵を多く残している。



「富士詣独案内」より

20. 相模国大隅郡大山寺雨降神社真景（さがみのくにおおすみぐんおおやまでらあふりじんじゃしんけい）／ 歌川貞秀(橋本玉蘭)画

江戸 林庄板 安政5年(1858)刊 3枚

左端には江ノ島、右奥には富士山を望む大山神社を含めた、大山全景の三枚続きの錦絵。大勢の参拝者も描かれ当時の活気がうかがえる。



「相模国大隅郡大山寺雨降神社真景」より

21. 横浜海岸通之図（よこはまかいがんどおりのず）／ 歌川広重(3 世)画

江戸 伊勢屋喜三郎板 江戸後期～明治初期頃刊 3 枚

安政 6 年(1859)の開港後、江戸後期から明治初期にかけての横浜港の様子を描いた錦絵。左側に見えるのは慶応 3 年(1873)に築造され、2009 年に復元された象の鼻波止場で、波止場の後ろ側、三本の塔のある建物はイギリス領事館である。

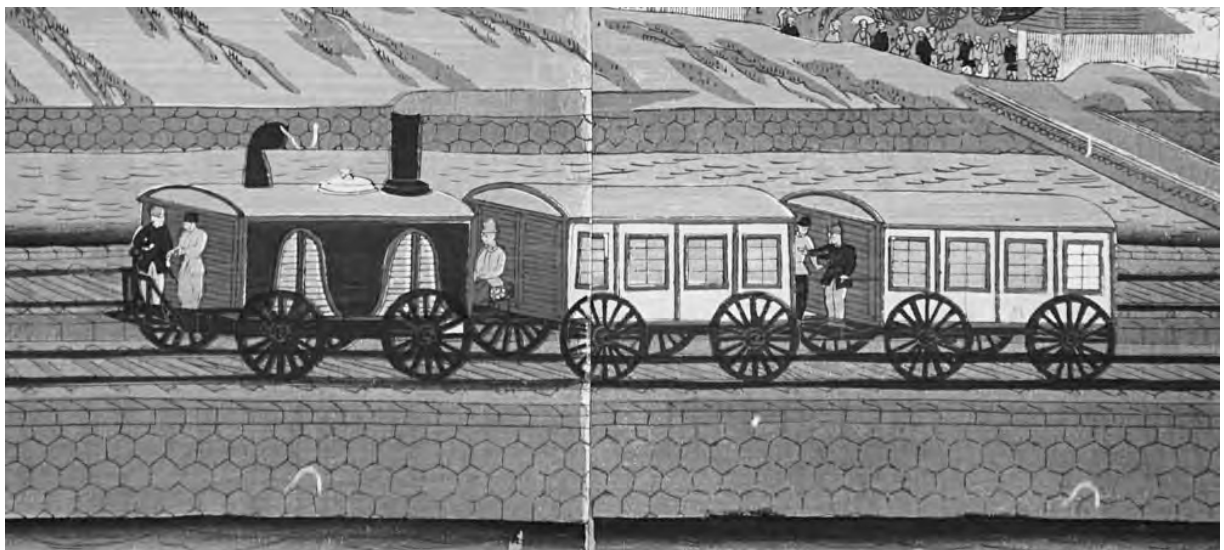


「横浜海岸通之図」より

22. 東京高輪海岸蒸気車鉄道走行之全図（とうきょうたかなわかいがんじょうきしゃてつどうそうこうのぜんず）／ 一猛斎芳虎画

東京 加賀屋吉兵衛板 明治初期 3 枚

明治初期、鉄道開業の頃に一猛斎(歌川)芳虎によって描かれた錦絵。八つ山(日本初の陸橋)、御殿山や高輪界限など現在の品川駅近辺を走る蒸気車の様子が描かれている。



「東京高輪海岸蒸気車鉄道走行之全図」より

23. 万国人物圖（ばんこくじんぶつず）

明治初期写 1軸

江戸後期頃成立と推定される。基本的には各国の男女一組が描かれており、国名とその国についての説明文がある。展示資料の書写年は明治に入ってからと思われる。

24. 後三年合戦絵巻（ごさんねんかつせんえまき）

延享3年写（1746） 3軸

室町時代に成立。源義家が奥羽の乱を平定した後三年の役(1083-1087)の史実にもとづく合戦記の絵巻。この戦の起こりは陸奥六郡を領地としていた清原武則の孫、真衡(さねひら)が、養子成衡(しげひら)の婚礼祝いに参上した出羽の国の一族、吉彦秀武(きみこのひでたけ)に欠礼をしたことが発端となって、真衡と秀武の武力衝突に至った。上巻は事の発端から、平定のため参戦する義家、真衡の死、寒中での戦いまで、中巻は難攻不落を誇った金沢柵の兵糧攻めまでが描かれ、下巻には金沢柵の落城と義家の勝利が描かれている。

25. 十番切（じゅうばんぎれ）

寛文・延宝頃写（1661-1681） 2軸

室町時代に成立。「曾我物語」の巻九から巻十一までを題材に書かれている。建久4年(1193)5月28日夜半、曾我兄弟はついに父の仇敵、工藤祐経を討つ。直後十人と戦い、兄の祐成は仁田四郎忠に首を落とされる。弟の五郎時宗は頼朝の御所に向かうが、女装した武将、五郎丸に取り押さえられ、捕縛の上訊問を受ける。頼朝は助命の許しを下すが、時宗は辞退して斬られてしまう。後日、頼朝は富士の裾野に社を建てて二人の兄弟を祀った。



「十番切」より

※1 奈良絵本（ならえほん、ならえぼん）

室町時代後期から江戸時代にかけて、公家や武家、裕福な町人層の婦女子を対象として作られた彩色本。内容はほとんどが御伽草子から取られ、金泥や金箔を用いた華麗な装丁のことが多い。初期は卷子本の形態が多かったが、徐々に冊子体に移行した。奈良の絵仏師が製作に携わったためこの名がついたと言う説があるが、詳細は不明である。

※2 池田亀鑑博士（いけだきかん 1896-1956）

平安文学、特に源氏物語の研究者として知られる。「源氏物語」の異本関係の研究や語彙索引の研究など長期にわたり研究を続け集大成した。博士が研究のため集めた平安文学の文献約 6000 点は、本学に移譲され「桃園文庫（とうえんぶんこ）」として所蔵されている。

※3 御伽草子（おとぎぞうし）

室町時代から江戸時代初期にかけて作られた短編物語を総称して言う。教訓的・空想的・啓蒙的な内容のものが多く、写本、絵巻物、奈良絵本などさまざまな形で流布した。

※4 極札（きわめふだ）

書画や刀剣の鑑定結果を短冊形の小さな紙に記したもの。極め書きともいう。

※5 雁皮紙（がんびし）

ジンチョウゲ科の落葉低木であるガンピを原料とする手漉き紙。斐紙、薄様、鳥の子紙などはすべて雁皮紙である。繊維が密で、滑らかな表面を持つため細かい文字や絵に適している。光沢の美しさや強い紙質から「紙の王」と呼ばれた。

※6 胡蝶装（こちょうそう）

用紙を一枚ごとに二つ折りにし、外側の折り目に沿って 5mm ほど糊付けして重ねて貼り合わせ、表紙をつけて冊子としたもの。厚い本には剥かず、利用が多いと糊の部分が剥がれてばらばらになってしまうのが欠点であった。本を開くと蝶の翅が開くように見えるためこの名がある。粘葉装（でっちょうそう）とも呼ばれる。

※7 嵯峨本（さがぼん）

慶長期(1596-1615)の後半から、国文学書を中心に、ほとんどひらがな交じりの木活字本で刊行された。京都嵯峨の学者・書家である角倉素庵(すみくらのそあん 1571-1632)が、芸術家本阿弥光悦(ほんあみこうえつ 1558-1637)らの協力を得てつくった私家版である。出版地の名をとって嵯峨本と呼ばれるが、素庵の自筆及び意匠によるものを角倉本、光悦によるものを光悦本とも呼ぶこともある。本文には雲母を引いた厚手の楮紙や五色の紙を用い、表紙にも雲母で花鳥などの模様をあらわしたり、染色し、すぐれた彩色の挿絵を入れる等、豪華絢爛たる装丁の施された美しい本である。

※8 滑稽本（こっけいぼん）

「道中膝栗毛」などにより確立された小説の一種。享和から文政年間(1801-1830)頃に流行した。

※9 錦絵（にしきえ）

浮世絵版画の史的展開の最終部に位置する多色版彩色画。幕末には報道性の強い風俗絵が多く生産され、明治中期まで及んだ。

語り継がれる書物たち ―附属図書館特別図書展―

2013 年 6 月 3 日 発行

著 者―東海大学附属図書館

印 刷―事務部 業務管理課（印刷担当）

発行者―東海大学附属図書館

<http://www.time.u-tokai.ac.jp/>

〒259-1292 平塚市北金目 4 丁目 1 番 1 号

電話 0463-58-1211 (代)
